

田んぼの生きもの調査 結果発表

2008年6月29日(日)

大潟の自然を愛する会 観察会

日時：2008年6月29日(日) AM9:00～12:00

主催：大潟の自然を愛する会

参加者：大潟村内外の小学生15名と親、合計約40名

調査地：大潟村内、秋田県立大学実験ほ場

田んぼに親しむ。

田んぼや生きもの大切さを楽しく。

大潟村は住宅地区と田んぼが何キロメートルも離れていて、農家の子どもであっても、田んぼやその周りの自然に親しむことがほとんどできません。「今回の観察会は、子どもたちが大潟村の田んぼに親しみ、楽しんでもらうことが第一の目的」(大潟の自然を愛する会 堤朗さん)でした。大潟の自然を愛する会では、地域の自然に親子で親しんでもらおうと、田んぼの観察会や、自然の観察会を毎年開催しています。

参加者は生きものを採取するための網や、生きものを入れるためのシュガーポットを持ち寄り、田んぼの生きもの観察と、水路の生きもの観察を行いました。

観察会を開いた田んぼは、秋田県立大学の実験水田で、農薬や化学肥料をいっさい使わない農法を始めて5年目になります。研究の一環として、田んぼのふちの部分には深さ数十センチの溝が掘られ、田んぼが水を落とす期間にも多様な生きものが水中へ逃げ込めるように工夫されているのが特徴です。

「昨年、(コナギ対策で)乾燥させたので、生きものが減っているかもしれない」と秋田県立大学の近藤先生は観察会の前に心配していましたが、ゲンゴロウやガムシといった甲虫類をはじめ、多様な生きものが見つかりました。

ポスターを子どもたちに見せながら「みんながお米を食べないと、田んぼがなくなってしまう。生きものも生まれなくなってしまう、環境が守られなくなってしまう」といった発表を、生物多様性農業支援センターの原覚俊が行い、続いて「(田んぼの魚である)メダカが絶滅危惧種になってしまったのはなぜか、子どもたちも考えてほしい。私たち農家は、大潟村の環境を守りながら農業をしてきた」と堤さんが、子どもたちに語りかけました。

野外用の顕微鏡を使ってミジンコの観察も行いました。「ミジンコは一つしか目(複眼)がない」「背中に卵がある」「ミジンコのような生きものがあるから、肥料が稲の養分に分

解される」といった解説を聞きながら、子どもたちは順番を争って顕微鏡をのぞいていました。

「小さな子どもは、今はわからないかもしれないが、大きくなってから生きものの大切さ、田んぼの大切さを思い出す貴重な経験になったのでは」（堤さん）

●見つかった生きもの

田んぼの中：ミズダニ（幼虫）、コガムシ（成虫、幼虫）、ヒメガムシ（成虫、幼虫）、ゲンゴロウ（成虫、幼虫）、ヒメゲンゴロウ（成虫、幼虫）、チビゲンゴロウ（成虫、幼虫）、コシマゲンゴロウ（成虫）、コガシラミズムシ（幼虫）、ハネカクシ、ミジンコ、ヨコエビ、オオコオイムシ、アマガエル、ヒメアメンボ、ケシカラビロアメンボ、ハシリグモの仲間

水路：タイリクバラタナゴ、モツゴ、アミ、ヨシノボリの仲間、ヌマチチブの仲間、スジエビ、ヨコエビ、ギンブナ、ヘラブナ、コイ

●結果から

甲虫類が多彩にいる大潟村の田んぼの生態系におどろきました。ゲンゴロウの幼虫を子どもたちが不思議そうに観察していましたが、今では農家の子どもでもめったに体験できないことではないでしょうか。近年の多くの水田の水路では、コンクリート化や薬品による水質の悪化に強い5～6種類程度しか魚類が見つからないことが多いですが、10種類以上の多彩な魚類が見つかりました。ヨシの茂る豊かな土水路を今後も守ってほしいです。

（NPO 生物多様性農業支援センター 事務局 原覚俊）



観察会は「学校が休みの日曜日に開催するのだから楽しい活動にしたい」という堤朗さんの思いが込められた



甲虫の専門家、佐藤福男氏がガムシやゲンゴロウを子どもたちに解説した



千拓博物館で展示準備が進むうなぎ。
大潟村の田んぼに遡上してきた。体長 1m を超える

(報告：NPO 生物多様性農業支援センター 事務局 原覚俊)